

学年	高校2年	教科	国語	科目	文学国語	単位数	2
教科書名		精選 文学国語 (明治書院)		副教材名	一日一講 文学 (三省堂)		
コース・クラス		中高一貫文系					

I. 目標

言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で的確に理解し効果的に表現する資質・能力を育成することを旨とする。

II. 授業のねらい

- ・生涯にわたる社会生活に必要な国語の知識や技能を身に付けるとともに、我が国の言語文化に対する理解を深めることができるようにする。
- ・深く共感したり豊かに想像したりする力を伸ばすとともに、創造的に考える力を養い、他者との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようにする。
- ・言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化の担い手としての自覚を深め、言葉を通して他者や社会に関わろうとする態度を養う。

III. 授業の進め方

- ・難関大学入試問題などを教材とする演習授業を行う。
- ・自らの力で文章を理解し、説明できる言語能力を養成する。
- ・図説等の副教材を適宜活用し、確認テストを実施する。
- ・講義形式・A L・電子黒板・I C Tなど聴覚・視覚に訴えるよう、様々なツールを活用する。
- ・学術論文や難解な文学作品などを素材として、作品批評や作品鑑賞などを行う。
- ・語学的な知識の習得を目的とした小テストを実施する。
- ・「文芸コンクール」に向けての学習や準備も適宜取り入れる。

IV. 学習上の留意点

- ・教科書の新しい単元に入る際は、予習として意味調べや漢字の書き取り、作品の通読を行うこと。
- ・授業中には、板書や必要な情報や気づいた点などをノートに書くこと。
- ・授業中には、積極的に発言をすること。
- ・わからない点はそのままにせず、質問や調べることで解決に努めること。
- ・配られた資料は、ノートに貼るかファイリングをし、必ず保存管理すること。
- ・毎時教科書、ノート、副教材を授業前に準備し、机の上に置いておくこと。
- ・その日の授業内容は家庭で復習すること。

V. 定期試験

- 1 学期 中間試験 : 『言葉によって』、『鞆』、初見問題
- 1 学期 期末試験 : 『悪童日記』、『詩の自由を探る』、初見問題
- 2 学期 中間試験 : 『夏目漱石・芥川龍之介往復書簡』、『マンガは哲学する』、初見問題
- 2 学期 期末試験 : 『「東京語」の表象の成立』、『短歌の輪郭——現代にとって短歌とは何か』、初見問題
- 3 学期 学年末 : 『現場に来て初めてわかること』、『野火』、初見問題

VI. 評価の方法

- ・定期試験・授業内容をしっかりと理解し、それを応用することができる。
- ・小テスト・計画的に自学自習を行い、意欲的に小テストに臨むことができる。
- ・提出物・積極的に授業に参加し、課題に対して期限を守り、真摯に取り組むことができる。

VII. 授業計画

学期	月	単元・学習項目	評価方法	到達目標
一学期	4	『言葉によって』 大江健三郎	定期試験 小テスト 提出物	<ul style="list-style-type: none"> ・ 文学的な文章やそれに関する文章の種類や特徴などについて理解を深めることができる。 ・ 言葉には、想像や心情を豊かにする働きがあることを理解することができる。 ・ 情景の豊かさや心情の機微を表す語句の量を増し、文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにすることができる。 ・ 文学的な文章における文体の特徴や修辞などの表現の技法について、体系的に理解し使うことができる。
	5	『鞆』 安部公房		
	6	『悪童日記』 アゴタ・クリストフ/堀茂樹訳		
	7	『詩の自由を探る』 藤井貞和		
二学期	9	『夏目漱石・芥川龍之介往復書簡』	定期試験 小テスト 提出物	<ul style="list-style-type: none"> ・ 文学的な文章を読むことを通して、我が国の言語文化の特質について理解を深めることができる。 ・ 他の作品と比較するなどして、文体の特徴や効果について考察することができる。 ・ 作品の内容や解釈を踏まえ、人間、社会、自然などに対するものの見方、感じ方、考え方を深めることができる。 ・ 設定した題材に関連する複数の作品などを基に、自分のものの見方、感じ方、考え方を深めることができる。
	10	『マンガは哲学する』 永井均		
	11	『「東京語」の表象の成立』		
	12	『短歌の輪郭——現代にとって短歌とは何か』		
三学期	1	『現場に来て初めてわかること』	定期試験 小テスト 提出物	<ul style="list-style-type: none"> ・ 作品に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉えるとともに、作品が成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、作品の解釈を深めることができる。 ・ 文学的な文章を書くために、選んだ題材に応じて情報を収集、整理して、表現したいことを明確にすることができる。 ・ 文体の特徴や修辞の働きなどを考慮して、読み手を引き付ける独創的な文章になるよう工夫することができる。
	2	『野火』 大岡昇平		
	3			

※ シラバスの内容（時間や事項）については、理解度やその他の都合により変更することもあります。